

## 『ソフィ女士の日記』に語られる女同士の絆

高 媛

### 1. はじめに

丁玲の出世作である『ソフィ女士の日記』<sup>1</sup> (1928年) は、発表後すぐに大きな反響を呼んだ。特に、作品中、女性の性的欲望が赤裸々に描かれたことで、大変注目され、一時的に批評の的にされた。<sup>2</sup>1980年代以降、フェミニズム文学批評が中国において盛んに行われ、その時流の中で、丁玲作品も再評価されるようになり、本作品に対する批評には、多元的なスタンスがみられるようになった。特に、「女性の立場」に立って作品を考察する批評スタンスが多く見られる。<sup>3</sup>本稿も、「女性の立場」という観点に立ち、この作品を再検討する。

まず、丁玲の文学界に入る動機について、尾坂徳司は「南京で共に「自修生活」をおくった王剣虹女士と丁玲との間に、同性愛的なものが存在し、その王剣虹女士の影響が丁玲を文学に飛び込ませたのかもしれない」<sup>4</sup>と述べている。更に彼は「私には、どうしても二人が同性愛的な関係にあったように思える」<sup>5</sup>という表現で自分の考えを述べている。丁玲が同性愛者であったかどうかについては、本稿の目的ではないため、深く考察を行わない。ただし、著者は女性であっても、「レズビアンでなければ、本当の女性同士の感情を表すことができない。それはセクシュアリティ（性的指向）により、女性の描き方が全然違う」<sup>6</sup>と寿静心が述べるように、著者丁玲は、実際の同性愛者ではないとしても、少なくとも心理的にはそうした傾向があることは、作品中の人物に同性愛的な性格が与えられていることから推測できる。

また、作品中ヒロインのソフィがもう一人の女性（蘊姉）のことを「お姉様」と呼んでいるが、それは「日本で女学生が使うエスとよく似た感じがあり、更にその「お姉様」が王剣虹らしいと考えればいい」<sup>7</sup>と連想させる。

興味深いことに、著者丁玲は、自ら経験したこのような王剣虹との姉妹情誼を作品に投影させているように思われる。この問題意識のもとに、本稿で

は、作中に描かれているソフィと蘊姉との女性の絆に焦点を当て、考察を試みる。そのために、まず女学生、性観念等の社会背景を踏まえ、その上でソフィの分析を行う。

## 2. 1920年代における女学生について

### 2-1 「女学校」—女性同士の絆を追求するルート

中国で近代化が始まった清朝末期から民国期にかけての同性愛の受け止められ方は、明治末から大正期の日本と類似した状況にあったと言われる。<sup>8</sup>また、この時期の日本において、西洋から性科学の知がもたらされたことにより、女学生や女学校という場、あるいは学校の寄宿舎が「同性愛」の温床であるという事実の認識が広まった。<sup>9</sup>それゆえ、1920年代中国においても、女学校が女学生同士の間広がる「特殊な情誼」を追求する一つのルートになったことは推測できる。以下では、1920年代中国における「女学生」の歴史について簡単に振り返ってみたい。

日清戦争で敗戦した経験は、中国に民族の危機をもたらした。また西洋の男女平等の教育観念が同時に導入され、当時の革命派や先進的な知識人は女子教育レベルが国力にかかわる重要事項だと初めて認識し、更に、それこそが中国を繁栄させる重要な手段だとした。<sup>10</sup>にもかかわらず、青年女性は男女が交際する自由な空間、すなわち「男女共学校」ではなく、女性同士一緒に勉強し、生活を共にする女学校に入学するのが一般的であった。中国近代以降最初の女学校とは、アヘン戦争以降、来華宣教師によって、教会が開設したものであった。<sup>11</sup>この時期になると、女子教育事業を発展させる主要な手段として、中国人による女学校が多く設立された。<sup>12</sup>20世紀初期になると、資本階級革命派がより女子教育を重視し、さらに近代的な女子教育を推し進めた。当時中国の女学校においては、西洋の政治思想と科学文化知識などが教育内容の主軸であった。<sup>13</sup>

一方で、同性愛を招くものは、「“性単一”な空間、いわゆる異性と完全に隔離されている環境が原因である」<sup>14</sup>とされている。それは「“性単一”な空間においては、異性となかなか接することができない、または接しづらい。逆に、同性の方が身近である」<sup>15</sup>からだと考えられる。そのため、セクシュアリティが同性に向かうのは当然といえる。女学校という明らかな“性単一”な空間において、男女交際ができないのは、異性の欠乏状態にあるためとい

うだけでなく、厳格に禁じられていることも原因である。それゆえ、独立した人格と精神的な自由をはじめて得た若い女性は、この空間において同性と自由に交際し、共通した生活状況や、類似した経歴などについて互いに分かち合い、より理解と賛同を得られた。また、リリアン・フェダマンによると、女同士の親密な関係が発展するためには、「ある程度の余暇と私的空間が必要条件だ」<sup>16</sup>と述べられているが、女学校では、女同士と一緒に勉強し、生活するので、その結びつきを育むのに必要な、自由時間は充分確保できていたと言える。

## 2-2 西洋からの新しい思想・1920年代における知識人女性のセクシュアリティ

### 2-2.1 性科学の輸入・性教育の普及

1920年代、「性」に関する海外の理論を中国に紹介する上で、『婦女雑誌』（1915年1月—1931年12月）が大きな貢献をしたと言われている。『婦女雑誌』には、海外の記事を翻訳したものが多く掲載されており、海外の学者の主張を中国に広く知らしめることになった。たとえば、『婦女衛生新論』<sup>17</sup>が連載され、少女から妻になるまでの各時期における女性の衛生について、結婚準備や妊娠分娩などの問題も含め、詳しく紹介された。それらの記事は、自身の生き方や衛生について女性が理解を深める材料となり、また「性」に関するさまざまな問題を扱っていたため当時は性教育のよい教材となりえた。20年代に「母性の自由」が提唱されるのに伴い、『婦女雑誌』を主とするマス・メディアは、西洋の性科学（sexology）を輸入し、有名な理論家であるジークムント・フロイト、イワン・ブロックなどの論文を翻訳して取り上げ、中国知識人に衝撃を与えた。このとき、「性教育」「性病」「妊娠」「月経」などの新しい言葉も導入された。また、『教育雑誌』は1923年8月に「性教育特集号」を発行し、性教育と性知識の普及を推進した。<sup>18</sup>

以上のことを通し、性に関する知識が人々に広まることで、女性の権利の拡張を求める運動が促進され、伝統の禁忌とイデオロギーへの挑戦へとつながった。<sup>19</sup>

### 2-2.2 「産児調節」—女性の身体からの解放

1922年4月に訪中したサンガー（Margaret Sanger, 1883-1966）夫人によつ

て、「産児調節」<sup>20</sup>という新たな観念が、中国に持ち込まれた。彼女は「女性解放の必要条件は参政権ではなく、自由に自分の身体をコントロールできることである」<sup>21</sup>と主張した。この観念が導入されて以来、知識人たちは性教育の展開や、性にかかわる問題についての公開討論を試み出した。瑟盧は、それについて、「女性が出産の機械という役割または運命から抜け出し、経済的独立と社会奉仕の機会を得るための唯一の方法である」<sup>22</sup>と評価している。

この科学的避妊方法の導入によって、女性は生理的に解放され始めた。そのため、数千年来、受動的な立場に置かれ、天命に任せられていた女性の出産は、やっと女性自らの意思でコントロールできるようになった。出産調節は確かに自然の支配からの女性の解放を促した。このとき、避妊の導入によって、「人は自然から解き放たれ」同時に、「女性が男性の統治から解き放たれた」<sup>23</sup>という二重の意味で革命がもたらされたのだ。

伝統的に、中国では長い間、性は社会の秩序を脅すものだと考えられており、そのため性に関することは儒家の伝統において「非礼」にあたるものとされてきた。しかし、当時の知識人たちは、このような儒学を非難し、産児調節の観念をすすんで受け入れ、サンガー夫人を褒め称えた。彼らは女性を生殖の機械とみなす伝統を攻撃の対象としたのである。彼らはこの主張において、二つの伝統的なタブーを破ることとなった。すなわち、公然と「性」を討論してはならないというタブーと、「跡継ぎがないことは最大の不孝」という観念に基づく「子孫を絶やしてはならない」とするタブーを冒したのである。

この時期、女性の権利を拡張するという思想のもとで取り上げられてきた出産調節は、伝統的な思想イデオロギーや禁忌侵犯といった問題に直面したのである。

### 2-2.3 古い婚姻観の転覆、新しい恋愛観の構築

1920年代当時、中国の結婚観念に強い衝撃を与えたのは、スウェーデンの女性思想家エレン・ケイ (Ellen Key, 1849-1926) の思想であった。彼女の「恋愛結婚論」、「自由離婚論」及び「母性論」は1920年代の中国ではかなりの影響力を持っていた。エレン・ケイのさまざまな理論の中で、もっとも際立っていたのが自由恋愛、自由結婚についての主張であった。彼女は『恋愛と結婚』<sup>24</sup>という著書で、「恋愛は結婚の唯一の前提であり、恋愛のない結婚

は非道徳的なものであり、人格の墮落である」と強調している。この他、彼女は離婚の自由や、古い婚姻制度への反対などについても主張している。

「新性道徳特集号」(第11巻11号)が、『婦女雑誌』に掲載された。その記事中に、従来の性道徳の考え方で最も問題なのが「性行為が結婚という形式を踏んだ男女二人の間でのみ行われるべきものと規定していること」であると指摘された。これを受け、論者たちは『婦女雑誌』の上で、①性関係において男女は平等である、②性関係自体は私的なものだが、生殖は公的なものである、③自分と他人を害さない恋愛や性関係は不道徳ではない、という三点を新しい性道徳として主張した。<sup>25</sup>

また、『婦女雑誌』の執筆者は、終始、女学生たちの学校で勉学する目的に関して、勉学それ自体ではないのではないかと疑っていた。『婦女雑誌』編集長であった章錫琛は、女学生の勉学の目的は主に教養を嫁入り道具とすることではないかと考えていた。<sup>26</sup>章錫琛などは、女性解放運動の根本的道は、教育や経済的独立、政治、職業、労働運動への参加ではなく、自由恋愛、あるいは正しい性の観念や母性の提唱にあると明言している。<sup>27</sup>

以上の通り、貞操論争と新しい性道徳論争など、公に「性」や「性欲」の問題が論じられたことには、当時開放されつつあった中国知識界の状況がうかがわれる。<sup>28</sup>そして、『婦女雑誌』及び知識人たちによる議論のなかで、エレン・ケイと彼女の「恋愛結婚論」は1920年代における現代的な性観念の代名詞になっている。興味深いことに、当時の中国においては西洋から新たなセクシュアリティが自由権利を主張するという動きがあった。本稿では、異性愛中心主義を信奉している社会において、主人公ソフィのセクシュアリティに対しての選択と、この1920年代という時代背景との関連から小説『ソフィ女士の日記』を読み解きたい。

### 3. 女同士の絆・レズビアン連続体

#### 3-1 女性の語り・沈黙からの脱出

女性のディスコースとしての日記は、女性との間には切っても切れない関連性があり、日記を書くことは女性の主体性を追究する一つの道だと考えられる。<sup>29</sup>『ソフィ女士の日記』の中の日記とは、ヒロインソフィにとって、定期的に会いに行くような「友」であり、打ち明け話の相手であり、恋人のような存在である。この日記は、誰も知らない彼女の心の秘密を彼女と分かち

合っている。日記はソフィにとって、最も親しい「女友達」であるとも言えよう。また、この日記は彼女にとって「彼女自身についてはっきり理解させてくれる、彼女自身を解放してくれる、そして結局彼女自身を取り戻してくれる」<sup>30</sup>のような重要な存在であるという。そんな彼女にとって、日記は自分を表現できる唯一の場なのだ。彼女が主体性を獲得する上で、日記が重要な役割を担っているのである。さらに、李銀河が主張するように、「手紙は同性愛者が自分の感情を表すために常に使う手段である」<sup>31</sup>とされるため、本稿では、日記の中でソフィに日記を書くように促していた蘊姉様との絆を、日記を書くという彼女の行為に込められた意味から考察してみたい。

### 3-2 女性のまなざし—男性への批判

ソフィの身体には肺の持病があり、彼女は死と直面する恐れに常にさらされている。「昼となく夜となく終始私は、死の際に何の憾みも残さず心おきなく死ねるような事を夢想しているのだ」(51 頁)という言葉から、自分の死を覚悟している彼女の心境が読み取れる。一方で、彼女は日々、周囲の人々のなかで「いつでも、はっきり自分を理解できる人がいてくれれば」(46 頁)と心から望んでいる。彼女は常に「私は、私自身が本当に求めているものが何であるかを言っているのかしら」と(51 頁)自分の探究心や快楽と社会倫理の間で葛藤を感じている。ソフィはまた、自身の生に対する執着についても、深く考える。その様子は次のように書かれている。

私は？私はこの切りつめられた長くない生ゆえにこそ、ますます激しく生に執着する。死を恐れるからでなく、生的一切をまだ享受していないと思うからだ。私は欲しい。私は快楽が欲しいのだ。昼間ともなく夜ともなく始終私は、死に際に何の憾みも残さず心おきなく死ねるようなことを夢想しているのだ。(同上)

上記からソフィとは、病気に酷く苦しんでいても、独立した自分の意志をもつ女性であることが読み取れるであろう。彼女は、自らの女の目で周囲の男性達を客観的に見ている。彼女の日記の中に登場する男性 6 人に対する彼女の態度について、以下で分析する。

男①：美男子凌吉士(リンジシー)は、「男性の高貴な美」<sup>32</sup>の魅力が強く、ソフィは、心奪われる。しかし、その美形の下に彼が自分の情欲を満たすた

めに「愛」の名を語っている卑しい魂が隠れていたことを知り、ソフィは許すことはできなかった。彼に向ける性的欲望からは、愛情の幸せは得られないことは明らかだと自分に言い聞かせる。

男②：葦弟（ウィディ）という男性に対しては、ソフィは異性としての魅力をまったく認めておらず、彼に対して性的欲望を全く感じない。また、よく泣く、子供っぽい性格の持ち主である葦弟をソフィは頼りない<sup>33</sup>存在と見なしている。彼の誠実さはソフィのエロスには訴えかけず、逆にソフィにとって御し易いと感じさせ、憐れを催させるにすぎない。

男③：友人の恋人である雲霖（ウンリン）という男性登場人物は、ソフィから見れば、彼は「子どもができるのを恐れて、一緒に住むことを避けよう」（54頁）としている禁欲主義者でしかない。また、ソフィは男性への性的欲望を隠さず、素直に表現しているため、「恋愛とはこんな理智的な、こんな科学的なものとは思わない」（同上）と彼のことを嘲っている。

男④：葦弟の兄という男性は、ソフィにとっては恨みを覚えているともいえる男性だ。大好きな蘊姉様と結婚してから「あの次第に冷めてゆく愛、あのうわべだけのにせの愛情に堪えられず、人生の味気なさを感じさせた。」（58頁）彼との結婚のせいで、蘊姉様を更に死に追いやった。愛する女性との関係を断ち切られた自分がやり場のない悲しみを抱くようになったのは、すべてこの男のせいだとソフィは思っている。

男⑤：この人物の姓名や外見、性格などには作中で一切言及されていない。明らかになっているのは、彼が安徽省出身であるということだけである。彼もソフィの目を通して批判の対象とされている。彼は一年前にソフィの心を煩わせていた。彼からの手紙には「まったくあの紙一面の愛だの恋だのという文句」（51頁）しかなかったと書かれている。愛が何であるかも知らない、このような無骨な男の手紙は、ソフィを不愉快にさせるだけであった。彼女は、自分の好まないこのような人からちやほやされるのが大嫌いであるという。

このようにソフィの目は周りの男性登場人物を評価し、彼らを客観的に見ている。更に、ソフィはその彼らに対する不満を日記の中で語っている。結局、男性に対して愛することを諦めたソフィは、自分がこれまでずっと求めてきた、この自分を真に理解してくれる人物とは、必ずしも男性ではないと

はっきりと理解したのである。つまり、このソフィの日記は、彼女の孤独について綴り、自分のことを理解してくれない男権的な世界からの避難所の役割を果たしている。

### 3-3.1 レズビアン連続体・異性愛への懐疑

日記の存在はその書き手にとって特別なものであり、「多くの日記は作者が特別扱いで話しかける相手をもつ。神である。するとあなたは全知の存在、何ものを見逃がさないすぐれたまなざし、永遠を代表する力を帯びる」<sup>34</sup>と言われるほどである。一方、ソフィが心を開いて話しかけることができ、この世で唯一の本音を話すことができる存在とは、親友の蘊姉様である。そもそも彼女が日記を書くことになったのも、「蘊姉様が手紙で再三再四請求してきた」ため「やむをえず書き始めた」(71頁)からだとする。また彼女は、「この日記は蘊姉様以外には誰にもみせたくない」(同上)とも書いている。「友人は何人もいて、私を非常に大事にしてくれはするが、その私との関係はどうてい蘊姉様の愛とは比較にもならない」(70頁)という言葉からは、いかにソフィが蘊姉様を心の支えとし、彼女に愛情を寄せているかが読み取れる。

この二人の関係についての分析にあたって、アドリエンヌ・リッチが「強制的異性愛」についての論文の中で導入した「レズビアン連続体」<sup>35</sup>という用語が有効であるため、以下で、それについてまず説明したい。「レズビアン連続体」とは、性器的性愛の経験、あるいはその願望を含む関係から、母と娘関係、女性同士の友情、さらに政治的連帯のつながりに至るまで、広い範囲にわたる女性の間での親密な関係を指す。これらすべては、「女同士の一次的な強い結びつきの形」である。

中国では、「普遍的に父権制文化に抑圧されている状況下における女性同士の友情と支え合いは、女性の生活と生き方において重要なものである」<sup>36</sup>と言われるが、ソフィと蘊姉様は、まさに、互いに支持し合い、保護し合い、無償で愛し合い、各々の体験を分け合いながら、絆を深めていく。また、「女性同士の愛は精神的な喜びの追求であり、コミュニケーション、手紙などをその支えとしてきた」<sup>37</sup>と劉伝霞が述べているように、二人の絆の深さは、次のソフィの日記に書く言葉にも垣間見られる。

蘊姉様は眼に入れても痛くないほど私を甘やかしか可愛がってくれたので、

私は仮病を使って床から離れなかったものだ。蘊姉様から愛撫してもらいたいばかりに、おろおろして私を慰める言葉もなく早や流れ出す涙の味を慕って、机にうつぶして何でもない不満ごとを考えてはめそめそ泣いたものだ。夜更けのフランス公園の芝生に寝転んで、蘊姉様の唱う牡丹亭を聴いたことなどを考えただけでも胸がつまる。(69頁)

このようなソフィと蘊姉様との連帯は、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』にも描かれているような理想的な絆でもある。この連帯関係は「相手を通して自分を際限するためのものである」。つまり、「分離というものがなくなっているので、闘いも、勝利も、敗北もない。まったくの相互性において、それぞれが同時に、主体かつ客体である。この二重性は暗黙の合意である。」<sup>3</sup>このような理想的な状態は想像的なものでありながら、女性が心底から求め、追求するものである。

更に、相手の腕の中であやすのを好む気持ちは、レズビアン女性同士と共通しているとボーヴォワールは述べている。<sup>3</sup>以下に挙げる男に失望した女ソフィの言葉からも読み取れる。

もし、蘊姉様が生きていて、この日記を見たら、きっと、私を抱いて泣くにちがいない。「ソフィ、私のソフィ、私はどうしてもうすこし偉くなって私のソフィにこんな苦しみをさせないようにできないでしょう」といって。(73頁)

近代において「新旧社会における社会規範と女性自身が本当に求めていることとの間の衝突と葛藤は、女性同士の愛を生み出す根本的な原因と心理的な動機」<sup>4</sup>となってきた。男性に対して諦めを抱くソフィは、蘊姉様こそが自分を慰めてくれる存在だと信じている。愛情という感情の交流は、異性の間にしか生じないものだと考えられがちであるが、この二人の女性の間には、まさに愛が花開いていると言えよう。ソフィが蘊姉様との間に精神的に強く結びつこうとする女性同士の新しい連帯は、「レズビアン連続体」であると言うことはできないであろうか。伝統的に認められてきた異性愛を転覆させるこのような連帯関係は世間には認められないかもしれない、またその感情に対するバッシングは免れることはできないかもしれない。けれども、それは、各時代において女性が経験する精神的な孤独や苦悶だけにとどまらず、異性愛結婚への恐怖と懐疑をも反映するものである。<sup>4</sup>

### 3-3.2 連帯関係の断絶・強制的異性愛の制度

20、30年代の女性作家によるレズビアン小説では、レズビアンの関係が悲劇に終わるような結末がパターン化していたといわれている。しかし、このような結末は女性間に芽生えた関係性や感情を否定するものではない。女性同士の愛を崩壊させるものとは、社会の倫理や道徳による抑圧だけではなく、異性愛イデオロギーの介入もある。<sup>2</sup>この作品では、蘊姉様の結婚によって、女性間の関係性は断絶させられる。愛する女性との関係を断ち切られ、ソフィがやり場のない悲しみを抱く様子は、次のように書かれている。

もし彼女が神に翻弄されたようにあの蒼白い男を愛しさえしなかったら、こんなに早く死にはしなかったろうし、私も一人で北京へ流れつき親しみも愛もなく病床に呻吟することもなかったろう。(70頁)

また、蘊姉様の手紙から彼女の結婚生活を知ったソフィは、さらに絶望に陥ることになる。その時の彼女の気持ちは次のように書かれている。

私は彼女を慰める言葉もない。彼女は、「私の生命も愛も私にはもう役に立たなくなりました」と、手紙の中に書いている。彼女はもはや私の慰め、彼女のために流す涙など必要はないのだ。ああ、手紙にはっきり書いてはいないが、私は彼女の結婚後の生活が推測出来た。神はなぜこれら愛に酔う人々を弄ぶのであろうか。蘊姉様は神経質で熱情家だから、とてもあの次第に冷めてゆく愛、あのうわべだけの偽の愛情に堪えられないのだ。(59頁)

更にこの結婚は蘊姉様を死に迫りやっした。そのため、ソフィは男性中心的なこの世界に不信感を抱き、異性愛や自由恋愛による婚姻にすら懐疑を抱くようになる。このことは、「20年代の思想が女性自身を成長させる女性の自覚と指摘していたもの」<sup>3</sup>のように見える。蘊姉様の死はソフィにとっては重要な意味をもつ。蘊姉様の死によって、二人の女性間の関係性は崩壊し、ソフィは精神的に苦しむことになる。この世の中で、唯一自分のことを分かってくれた蘊姉様の死にソフィが悲しみ、絶望する様子が、次の文章にも読み取れる。

蘊姉様はもうこの世にいない。私はこの日記を抱いて、どれほど泣きわ

めいたらいいのだろう！（51頁）

女性同士の感情の交流において、「最も貴重なのは、互いの心である」<sup>4</sup>と言われる。蘊姉様が亡くなった今も、ソフィの心には、自分にとって大切な彼女の存在がある。ソフィが日記を書きつづけているのは蘊姉様を悼むためであろうか、それともこのレズビアン的連帯を悼むためであろうか。いずれにしても、自分の精神を生きながらえさせるために、ソフィはこの日記を必要としているのだ。

### 3-4 女性からの無言の抗議

異性愛への諦めや、女性同士の連帯関係の断絶などの一連を経験し、ショックを受けたソフィは、身も心も疲れ果てる。そこで結局、彼女は遠くへ逃れることを選び、「汽車に乗って南下し知る人もないところでわが生命の残余を浪費する」（80頁）と決め、一人で孤独を味わうことになる。それは、女性が異性愛に妥協せずに抗議しようとしても、その無力感を覚える女性の姿の描写なのではないだろうか。彼女のようにセクシュアリティの選択に向けて必死に努力すること、苦悶している姿及び、苦悶を自分の手で書き綴ろうとすることは全て、新しい思想からの衝撃を与えた特殊な年代にあった女性の主体性の体現だと言えるのではないか。

## 4. おわりに

強制的異性愛の制度へ懐疑を向ける女性同士の絆は、従来隠され、抑圧され、否定されている欲望を直視し、観察することを可能にする。また、この絆のもとでは女性が新たに自身の性別を構築し直し、自我を救う試みがなされる。このことは、女性が自己を定義していくことや、自分自身をよりよく理解していくことにつながる。<sup>5</sup>この絆は女性たちが主体意識をもち、自己実現するのを促す。この点でまた、ソフィは1920年代にもたらされたもう一つの「女としての発見」<sup>6</sup>を体現していたと言えよう。また、ソフィが蘊姉様との間で築き得た、両者が互いに尊重し合えるような関係性が彼女と異性の間では成り立ち難いということを暗示し、この男性中心的な社会を批判しているように見える。

日記の意味として、この日記はソフィと彼女が心から愛する女性をつなぎ

とめるものでもある。これらの日記の役割に注目するならば、ヒロインが自身について書き、男性中心社会に対して抵抗するための「主体性」を獲得するという行為そのものが、女性同士の絆によって支えられていたと言えよう。また、日記全編を第一人称の叙事方式を採用することによって、女同士が身をもって体験したことが、更に生き生きと読者の前に現れてくる。この「レズビアン連続体」のような女性同士の絆は女性たちが主体意識をもち、互いに自己実現するのを促すことができると言えよう。

### 注

- 1 本稿では丁玲『丁玲文選—莎菲女士的日記』（人民文学出版社、2004年）所収の版を参照した。邦訳は、既訳岡崎俊夫訳（岩波書店、1956年）を参考にした拙訳である。
- 2 馮夏熊の「丁玲和她的作品」（『十月』第1期、1980年）、茅盾の「女作家丁玲」（『茅盾論中国現代作家作品』、1995年）、姚文元「莎菲女士们的自由王国」（『收穫』第2期、1958年）、董炳月「男権と丁玲初期小説創作」（『中国研究月報』、田畑佐和子訳、中国研究所、1960年）等である。
- 3 『中国女性の一〇〇年～史料にみる歩み』（中国女性史研究会編、青木書店、2004年、87頁）、朱棟霖、丁帆、朱曉進の『中国現代文学史：1917～1997 上册』（北京高等教育出版社、1999年、152頁）等である。
- 4 尾坂徳司著『丁玲入門』、青木書店、1953年初版、17頁。
- 5 尾坂徳司、同上、18頁。
- 6 寿静心『女性文学的革命—中国当代女性主義文学研究』、中国社会科学出版社、2007年、179頁。
- 7 尾坂徳司、前掲、17頁。
- 8 白水紀子「中国同性愛小説の作家とその周辺」、『南腔北調論集』、東方書院、2007年、540頁。
- 9 赤枝香奈子「女同士の親密な関係と二つの＜同性愛＞—明治末から大正期における女性のセクシュアリティの問題化」、『差異化する正義』、お茶の水書房、2004年、136頁。
- 10 顧秀蓮主編『20世紀中国婦女運動史』（上巻）、中国婦女出版社、2008年、35頁。
- 11 顧秀蓮、同上、13～15頁。
- 12 顧秀蓮、同上、64頁。
- 13 顧秀蓮、同上。
- 14 李銀河『同性恋亞文化』、中国友誼出版公司、2002年、52頁。
- 15 李銀河、同上。
- 16 リリアン・フェダマン『レズビアンの歴史』、富岡 明美等（翻訳）、築摩書房、

1996年、43頁。

- 17 景遜訳『婦女衛生新論』10巻1-12号、1924年1-12月。
- 18 この特集号には、席道直、黄公覚の「性教育概論」、沈沢民の「同性愛と教育」、林昭齊の「男女性と分析」等がある。
- 19 村田雄二郎『<婦女雑誌>から見る近代中国女性』、研文出版、2005年、175-176頁。
- 20 女性が子供を産み、育てるという責任に対し、自由に自分の意思も反映させることができはじめて、両性は真に平等で正常な生活を送ることになるといえる。
- 21 村田雄二郎、前掲、158頁。
- 22 瑟盧、「産児限制と中国」、『婦女雑誌』8巻6号、1922年。
- 23 村田雄二郎、前掲、170頁。
- 24 愛倫凱『恋愛と結婚』、朱舜琴訳、光明書局、1923年を参照。
- 25 中国女性史研究会、前掲、85頁。
- 26 章錫琛「女学生的人生観」、11巻6号、1925年6月、862-868頁。
- 27 「通信：恋愛問題的討論」、8巻9号、1922年9月、120-123頁。
- 28 中国女性史研究会、前掲、86頁。
- 29 高媛「丁玲『ソフィ女士の日記』に関する考察——女性的エクリチュールによる知識人女性の主体性分析——」、『多元文化』、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、2010年3月、142頁。
- 30 ベアトリス・ディディエ『日記論』、西川長夫・後平隆共訳、松籟社、1987年、139頁。
- 31 李銀河、前掲、86頁。
- 32 彼のスラリとした体、若いバラのような顔、柔らかい唇、人をひきつける眼ざし、それらは美形好みの女たちをいくらでも誘惑できるものだし、また彼のあの貴公子然とした物腰は、また愛情をもっているものをひきつけることができるのだ。65頁。
- 33 涙を少し大事にしなさいな、私がほかの女みたいに涙もろいと思っていたら大間違いよ。まだ泣いているの。お家へ帰って泣きなさいよ、私、涙を見るとムカムカするわ。48頁。
- 34 ベアトリス・ディディエ、同上、200頁。
- 35 レズビアン連続体という用語には、女への自己同定の経験の大きなひろがり——一人一人の女の生活を通じ、歴史全体をつらぬくひろがりを含みこむ意味が込められており、単に女性が他の女性との生殖器的性経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望を抱くという事実だけを指しているのではない。それを広げて、女同士のもっと多くの形の一次的な強い結びつきを包み込んで、豊かな内面生活の共有、男の専制に抵抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂している。アドリエヌ・リッチ「強制的異性愛とレズビアン存在」、『血・パン・詩—アドリエヌ・リッチ女性論 1979-1985』、大島かおり訳、晶文社、1989年、87頁。

- 36 劉伝霞、『被建构的女性-中国现代文学社会性别研究』、斎魯書社、2007年、291頁。
- 37 劉伝霞、同上。
- 38 シモーヌ・ド・ボーヴォワール、『決定版 第二の性Ⅱ体験』、中嶋公子 加藤康子監訳、新潮社、1997年、194頁。
- 39 シモーヌ・ド・ボーヴォワール、同上。
- 40 劉伝霞、前掲、286頁。
- 41 劉伝霞、同上。
- 42 劉伝霞、同上、287頁。
- 43 女性自觉的成长标记之一是：对以男性为中心的世界的深刻的怀疑，对异性恋爱以及自由婚恋结局的婚姻品质的重新审视。（常彬『中国女性文学話語流変 1898-1949』、人民出版社、2007年、185頁。）
- 44 寿静心、前掲、191頁。
- 45 劉伝霞、前掲、285頁。
- 46 女性自觉的两个成长标记：一是女性肉体的觉醒，女性欲望的觉醒；二是对以男性为中心的世界的深刻怀疑，对异性恋爱以及自由婚恋结局的婚姻品质的重新审视。常彬、前掲、185頁。